

母性愛神話と今日の子育ての課題

大日向 雅美

恵泉女学園大学大学院教授。発達心理学を中心として、ジェンダー論、子育て支援などを専門としている。一九七〇年代という非常に早い時期より母親の育児ストレスの研究を始め、母性に関する研究のわが国の第一人者として、その後も幅広く活躍。母性に対する神話ともいえる幻想がいかに子育てを困難にしているかということを中心に、子育てに関する研究を進めている。著書『母性の研究』（川島書店）、『母性愛神話の罨』（日本評論社）、『子育て支援が親をダメにする』なんて言わせない』（岩波書店）等多数。近年、文部科学省、厚生労働省、内閣府、各都道府県の審議会委員等を歴任している他、子育て支援のためのNPO法人あい・ぼーとステーションの代表理事も務めている。

皆様、こんにちは。ご紹介いただきました大日向と申します。本日はこのシンポジウムにお招きいただきまして、ありがとうございます。私に与えられましたテーマは「母性愛神話と今日の子育ての課題」ということです。時間はちょうど三〇分ということですので、早速始めさせていただきますと思います。

今ご紹介いただいたように、私は現在、NPO法人で子育てひろばを運営しております。また三〇数年、育児に悩むお母さんたちの声にも接してまいりました。昔と変わらない声も少ない一方、近年特有の声もあります。最初に、昨今私が接したお母さんたちの声を幾つかエピソードとしてご紹介したいと思います。

あるとき——と言いましたも昨年でしょうか——三人、四人のお母さんたちが私のもとをお訪ねになりました。お子さんたちはそれぞれ三歳ぐらいでしょうか。公園で子どもを遊ばせていたそうです。その公園にはとても人気がある遊具があつて、子どもたちはみんな列をなして順番を待っていたそうです。ところが、そこに一人の同じぐらいの年齢の子どもがちょこちょこつと割り込みしてしまつたそうです。当然その子の母親が注意をするかと思つて見ていたら、全然注意をしなかつた。注意しなかつただけでなく、なぜ自分が注意しなかつたかをこんなふうの説明したそうです。「今この子は、せっかくこの遊具で遊ぼうという意欲を示した。それなのに『順番よ』とか、『駄目よ』と注意をすると意欲をそいでしまう。今意欲をそいでしまつたら、将来、やる気のない子になってしまうから、私は注意をしません」と言つたそうなんです。

どこにでも屁理屈をこねる人がいるものですが、そんなことを言っていたら、その母親も仲間から浮いてしまうことでしょ

う。そばに居合わせた母親たちもさぞかし閉口したことかと思いで、そうした理不尽なことをいう母親に、どのように接したら良いかというご相談かと思いました。ところがそうではなかったのです。「私たちは、今まで『順番よ』とか、『駄目よ』とわが子に言ってきた。これは意欲をそいでしまったことなんでしょう。将来やる気のない子になってしまったらどうしましょう。ひきこもりにでもなったらどうしましょう」と、本当に真顔でご相談にみえたんですね。おそらく子育てに専念する前は、一定期間社会人として働いていらしたことでしょ。社会人としての常識はしっかりあると思われる三〇代の女性たちが、子どものことになると、どうして人としてのあり方の基本を見失ってしまうのか、改めて驚いた次第です。

もう一つは、幼稚園入園に関わる話です。母親にとって幼稚園選びというのは、とても頭を悩ます一つの課題ですね。あるとき、幼稚園入園をテーマに、先輩ママに話を聞く座談会を設けたことがあります。既にお子さんを幼稚園に通わせていらっしゃるお母さんたちを囲んで、これからわが子を幼稚園に入れようと思っているお母さんたちが何人か集まりました。

私は企画の段階で、集ってくる母親は、おそらく二〜三歳のお子さんをお持ちのお母様かと思つたんです。今年、あるいは来年入園を考える子どもの母親がお集まりになるのかと思つていたら、とんでもないことになって、とつても年齢が低

いんです。六カ月の赤ちゃんを連れただお母さんもいらつしやるんですね。「随分早くから入園準備をされているんですね」と言いましたら、「ええ？ 私、出遅れたと思つています」と言うんですね。「私の友人たちはみな、妊娠を知ったその瞬間から幼稚園選びを始めています。私なんてこの子が生まれちゃって、もう半年たつちやったんですよ。遅いんじゃないですか」と聞かれました。

これらは一例に過ぎませんが、母親たちは本当に子育てに一所懸命です。また、ちよつとたたいただけで、「私のしたことって虐待でしょうか、この子の心に傷を残してしまつたんでしょうか」と思い悩む母親たちも昨今少なくありません。子育てに本当に一所懸命です。一所懸命さというのは、私は何事においても必要なことだと思つてすけれども、でも、どこか自然な一所懸命さが気になります。母親の私が頑張らなくちゃ、私の子育ての仕方一つによって、この子の将来が決まってしまうんじゃないかと、そこまで思い詰めているお母様方が、三、四十年前からいました。今とても増えているように思います。

私はこうした現象の背後にあるものを「母性神話」と呼んできました。女性は生来的に育児の適性を持つている。だから育児は母親がすべて担うべきだとされ、子どものことはすべて母親一人の責務とみなされてきました。尤もそうした風潮への一種のアンチテーゼなんでしょうか、「母親がなんでわが子をか

わいく思わなくちゃいけないんでしょか、どうして母親が自分のことを第一にしていけないんでしょか」という声も近年、聞こえるようになっていきます。「育児はイライラさせられることばかり。子どもをたたいてどが悪いんですか。私の楽しみを最優先にしてどが悪いんですか」と公言してはばからない人も、中にはいます。それがもともとと極端になると、ネグレクトなどの虐待に陥ることもあります。こうしてみますと、子育てを巡って、母親たちは今、二極分化しているといえるように思います。

ただ、皆様もご存じのとおり、昨今は子育て支援ブームです。選挙のたびにどの政党もマニフェストの筆頭に子育て支援を掲げています。また、いろいろな自治体の首長さんが等しく「子育てするならわが市、わが町で」というキャッチコピーを大事にされています。しかし、本当に子育てがしやすい時代になったのでしょうか。

先ほど高石先生がご紹介くださいましたように、私は一九七〇年代はじめに起きたコインロッカーベビー事件をきっかけに、当時の社会の母性観に疑問を抱き、母親たちの育児不安、育児ストレスの現象に着目いたしました。私は当時は大学院生でしたが、母になる日も近いこともあって、人ごとではないという思いもありました。母親が子どもを殺してしまったり、育児を放棄してしまう現象に対して、けっしてあつてはならないこと

と胸を痛めました。一方で、「母性喪失の時代」「鬼のような母」と一斉に母親を批判する当時の風潮に、納得の行かない思いでした。母であれば、女性であれば、おなかを痛めれば、無条件に、生来的に育児の適性が備わっていると、それを發揮できないのは、もはや女性ではない、人間失格なんだ、という当時の風潮に対して、どうしても納得がいかなかったのです。本当に母性はそんなに確かなものなのか。こうした母性観は果たして母親を、そして子育てを大事にしていると言えるのだろうか。そんな疑問から、母親の実態を知りたくて、全国調査を始めました。

そのときに出会った母親たちの声、それが以後三十数年ずっと一つのテーマを追究させていたたく原動力となりました。まず一言で言うと、とつても立派な母親たちでした。私もその頃は長女が生まれていまして、同じ母として接していても、ああ、なんてご立派な方々なんだろうと思つたわけです。

ただ、程なくわかつたのは、当時私がつっていた研究手法が間違っていたという事です。私は、インタビュの時に、一言一句もさらず正確に言葉を記録しなくてはならないと思ひまして、許可をいただいた上でテープレコーダーを使用していました。取材中は、一言たりとも「育児がづらい」とか、「子どもをかわいく思えない」とはおっしゃらなかつたんです。二時間あまりお話を伺って、テープレコーダーを鞆の中にしてしまつて

おいとましようとする、実はそこから「もう一杯お茶飲んでいって」というように引き止める方がほとんどで、そして「実はね、子どもをかわいく思えないことがあるのよ。先週はベランダからこの子を放り投げようとしちゃって」、そんな本音を語ってくれたのです。

当時は、「育児がつらい」とか、「子どもをかわいく思えない」と公言できる時代ではなかったのです。でも、心の中はつらさでいっぱい。そんな母親の声に接して以来、私の研究手法はヒアリングが中心ですが、テープレコーダーを使ったことは一度もありません。全身耳にしてお話を伺う。言葉の正確さは何分の一かに落ちてしまうことは否認せんけれども、心でしっかりと向き合うことを大切にしております。

さて、そうして三十数年たつて、今こんなに子育て支援ブームになって、何が変わったのでしょうか。七〇年代のお母さんたちがちよつとでも「育児がつらい、この子から離れたい」などと言おうものなら、母性喪失、母親失格と糾弾された。今はそんなことありません。子育て支援ブームです。お母さんたちもテレビのインタビュでマイクが向けられても、育児がつらいということもはつきりとおっしゃるようになりました。でも、現実には依然として、特に女性が孤独な子育てを強いられているという点は変わらない。特に専業主婦の方々の子育ては、私は「孤育て（孤独な子育て）」と表現していますが、「こんなはず

じゃなかった。予想や期待とあまりにも違った」とおっしゃいます。

その期待とはどのようなものなのでしょうか。やはり母親というものに対して、大きな期待を持っています。中には、育児に専念するために仕事を辞める女性もいます。今第一子出産を機に七割弱の女性が仕事を辞めています。もつとも、そこにはまだまだ育児休業を取りづらいつか制度的な不備ももちろんあります。でも、制度的な不備に加えて、やっぱり母親の私が、特に三歳ぐらまではこの子のそばにいて、この手で育ててくなくてはいけないんじゃないかと思っておられる女性たちも決して少なくありません。

でも、いざ子育てに入ってみると、こんなはずではなかったと思うようです。こんなに一人の時間が持てないとは思わなかった。何も娯楽、遊興の時間が欲しいわけではないんです。例えて言うと、トイレに一人で入りたい、たまにでいいから手足を延ばしてゆつくりとお風呂に浸かってみたい、冷めていないお味噌汁を飲みたい、伸びてないおそばを食べたいとか、本当にある一定の限られた期間のことではあるんですが、人としてのゆとりを奪われる辛さに直面します。

ただ、こうしたつらさが専業主婦の方の本当のつらさではありません。よくお話を伺っていくと、やがて心のつらさを訴えます。話し相手がない。一語文、二語文しか話せない乳飲み

子と向き合っていると、脳から言語が消えていくみたい。失語症になりそうと訴えます。「じゃ、あなたは誰と一話話したいの？」と伺うと、どなただと思えますか。お母さんたちの期待を受け、その期待を見事に裏切る方。これはもうおわかりでしょう。（会場笑い）夫です。

ただ、私は男性を責めるつもりはありません。あとで申し上げる予定ですが、男性たちだつて育児をしたい、できれば妻としっかり向き合いたいと最近の男性たちはお思いになつていらっしゃると思います。それができない就労環境がある。そうした中で、母親の子育てはますます孤独を強める一方です。

さらに、今日の専業主婦のお母さんたちの一番のつらさは、社会との接点を奪われるということ。専業主婦の母親にとつて悩ましいのは、間もなく暑中見舞いのはがきが来る季節です。あるいは年賀状の季節だそうです。かつてのクラスメート、あるいはかつての同僚が近況を知らせてくれます。「今こんなプロジェクトで、こんな仕事をしている」。そういうのはがきを讀むと、「すてきね。頑張つて。ご活躍期待しています」、そんな返事を書くんだそうです。でも、いつ私は元の職場に戻るだろうか。元の職場でなくてもいい。子育てを経験した私の力を何らかの形で社会が使ってくれないかと思ふんです。でも、それはなかなかかわない。専業主婦の母親は、今この子と向き合つて子育てを一所懸命やつて、とても貴重なこと

だと思ふ方も少なくありません。でも、「先が見えない」とおっしゃいます。何年か後に、あとで根ヶ山先生がおっしゃる子別れがあります。子どもが自立していくでしょう。「そのときに私に何が残るの。私はどこで何をしたらいいかわからない。出口の見えないトンネルをさまよつてみたい」と言います。

子育てのつらさは仕事をしている母親、外で働くお母さんたちも同じです。ただ、働くお母さんたちは、当然ですが、専業主婦の方と悩みが違います。一番つらいのは子どもが病気のこと。子どももつて、どうして前の日から熱を出しておいてくれないでしょう」と言つた方がいらっしゃいます。前の日から熱を出してくれたら、いろいろ手当てができるじゃないですか。「夕べはあんなにびんびんしていたのに、どうして今朝になつて、急にこんなに熱を出してぐったりしているの」と。ぐつたりした子を間に挟んで、夫と妻の間で冷たい風が吹くんです。どちらが今日休むか。「ねえ、あなたもたまには休んで」と言うとき、夫が、「いや、僕、仕事があるよ」「私だって働いているじゃない」「給料どっちが多い？」と言われるんだそうです。「わかりました。じゃ、私が休むのね」。かくして子どもが生まれてから正職が続けられなくて、パートに替つた女性たちは非常に多いです。

それでも保育園時代は保育園の先生方のお力を借りて、なんとかやりくりできます。保育園が終わつてほつとするのも束の

間。「小二の壁」というのがあります。学童保育が充実していない地域はまだまだたくさんあります。小学校に上がると、子どもは本当に早く帰ってきますね。そうしますと、お子さんが小学校に上がった途端に正職では働き続けられない。あるいは長い長い夏休みもあります。学童保育だけでは乗り切れない。

こうした仕事と子育ての両立に悩みつつ、さらに一番つらいのは、「子どもが小さいとき、私が仕事なんかしていいんだろうか」という悩みです。これは外圧でもあり、ご自身の悩みでもあります。育児休業明けに職場に戻ろうとしたある若いお母さんが、両家のおじいちゃんおばあちゃんから連日のように抗議の電話を受け、ノイローゼになってご相談に見えました。「大事な孫になんてことをしてくれらんだ。保育園なんかに預けて」と「なんか」がつくんだそうですね。「子どもがかわいそうじゃないか。将来もしも何かあったらどうするんだ」と。周囲から言われるまでもなく、母親自身が後ろ髪を引かれる思いで職場に戻ろうとしているのです。いいんだろうか、いいんだろうかと。いわゆる三歳児神話の悩みも深いものがあります。

一方、父親です。お父さんも昨今は悩みを抱えています。私、十数年前に父親の育児ストレス、育児不安の研究をしたんですが、そのときは結局何もまとめることができませんでした。男性たちはほとんど悩んでいなかったんです。（会場笑い）

でも、最近では悩み始めています。その悩み方も二極化しています。依然としてお仕事に翻弄され、父親は「いざ」ときが出番だ」という幻想にすがっているお父さんがいます。他方で、本当にマニュアルチックに育児に一所懸命、励む父親もいます。早く帰宅する。早くお帰りがださるのは結構です。お子さんと向き合うのも結構です。でも、お仕事モードで子どもと向き合ってしまう。お仕事のよう「早く、きちんと成果を出せ」と。そうなりますと、一家の中でV字型ができてしまいます。お母さんも子どものことを夢中で見ている。お父さんも子どもに夢中。お父さんとお母さんの間が空白になっているV字型ですね。

こういう極端な例はともかくといたしまして、一般的、平均的な最近の日本の男性たちはとても優しくなりました。このようないろいろなシンポジウムも一つのきっかけなんでしょう。父親ももともと育児に関わらなくてはいけないと考えはじめています。尤も、仕事の都合等で、具体的に何かできない父親も依然として少なくありません。子育てに関わるときが一番大事なのは、夫婦のコミュニケーション。こんなメッセージを私も発してまいりましたし、いろいろな方がおっしゃってくださいます。妻が育児に悩んでいる。「ねえ、あなた、聴いてほしいんだけど、いい？」と夫にたずねます。七〇年代の父親は聴きませんでした。「なんでそんなことで悩むんだ。君は母親

だろ。しつかりしろ」と。最近の男性たちはお優しいです。「いいよ」とおっしゃるんですってね。でも、月曜日、育児相談がわーっと増えます。妻たちは土日を狙って夫に悩み事を相談するんです。そして、月曜日、「あんな人に言わなきゃよかった」と言って相談室に來られます。(会場笑い)

そこには、自分たちの子の子育てなのに、第三者的、客観的な関わりをしている夫像が浮かんできます。いいよとおっしゃったのであれば、最後まで聴いていただきたい。でも、いいよと言いながら、テレビのゴルフ番組などを見ている。わかりますよね、この人ちゃんと聴いているか、聴いていないかがうらやましい。中には、ちゃんとチェックを入れる妻がいます。「ねえ、あなた、私なんて言ってた？ 繰り返してみて」。ほとんどどりどりでできない。

次に多いのは、「結論はなんだ？」と迫るのだそうです。これも私は男性をお責めするつもりはありません。今日は優しい大日向さんなんです。男の人に厳しい、厳しいと言われてきたんですが、今日はそんなことございませんで、男性を責めるつもりはありません。ただ、「男は仕事。女は家庭」という性別役割分業社会では、男女が互いに住む世界が違うんだと思います。もっと正確に申しますと、女性は、男性は、じゃないんですね。女性だって仕事人間だったら、おそらくそうなるだろうと思います。仕事のモードは無駄がないことです。同じ過ちを

二度と繰り返すな。結論を先に、そして起承転結を明確に。例えば高速道路を突っ走っているようなものです。

でも、小さい子どもと日々暮らしているのは一般道路。渋滞があります。信号待ちもある。右折左折もあります。おんなじことを何度も何度も言わなくてはいけない。いわゆるお仕事現場の言語と、小さい子どもと向き合っている言語は同じ日本語と思わないほうがいい面があります。こうして、生活が分かれてしまっているということが、夫と妻の心も分けてしまっている。かつて子ども、子育ては夫婦のかすがいと言われました。今は溝になってしまっている。そのあたりをどう埋めていくかということ。これが、これから必要に必要に子育て支援の方途として考えなくてはならないと思います。

こうした育児に悩むお父さん、お母さんの声を聴きますと、そこから今必要な施策が出てくると思います。専業主婦のお母さんにはまずひろばが必要でしょう。孤独から解放することが必要でしょう。でも、どうかひろばを作ったらそれで事足りるとは思わないでいただきたい。おうちの中の母子カプセルが、ひろばでちょっと広めの母子カプセルに変わっただけというひろばも各地に見掛けます。そこには女性しか集まらない。支援者も女性、集まってくるのもお母さんと子ども、話題は子どもと子育て、なんら変わっていません。

けっしてひろばの意味を否定しているわけではありません。

私もひろばを運営しています。ただ、そうしたひろばに出てきた母親に対して、次のステップを考えることではないかと思いません。それは、女性の社会参画を促すことです。子育て中から社会参画の準備をする。子育てが一段落した後の就労支援を考えていく、あるいは子育て中でも、ちよつとでも時間を作って、何らかの形で社会参画していく。これは母親の人間支援だと思えます。日本社会は母となった女性を母としか見なかった。そこに社会人として、一人の人間としての視点をどう盛り込めるかということが必要ではないかと思えます。

もう一つ、働くお母さん、特に三歳児神話に悩むお母さんにはどんな支援が必要か。三歳児神話を丁寧に分析していくと、まさに今政府が取り組もうとしている施策に合致します。三歳児神話と一言で言いますが、実は私は三つの柱から成り立っていると考えています。一つは小さいときが大切。だいたい三歳まで。二つ目は、その小さいとき、お母さんの愛情が最善だ、お母さんの愛情だけがベストだという考え方。だから、お母さんは育児に専念なさいよという考え方ですね。三つ目は、もしお母さんが育児に専念しないと、子どもが寂しい思いをして、将来心や体に何らかのダメージを受けるだろうという懸念です。一つひとつ検証していきたいと思えます。まず、一本目の柱、小さいときの大切さ。これは私は否定しません。発達心理学の立場から言っても、これは真理です。ただし、なぜ大切かを考

えていただきたい。この時期は愛を知ることが大切なのです。愛されることで、子どもは自信を持てます。愛されることで人を信頼できる。しかし、そのときの愛は、お母さんの愛だけではありません。お母さんも含めて、お父さんも周囲の方の愛も、先ほど学長さんがおっしゃったおじいちゃん、おばあちゃんも、愛も、保育園の先生の愛も、責任を持って、この子を愛そうとする一定数の方々の愛が必要です。そうなりますと、お母さんだけと限定してきた二番目の柱はやはり疑問です。

さて、一番大事なのは三番目。もしお母さんが自分の手で育てないと、子どもはどうなるのか。これに関して、日本はまだ研究の成果が充分揃ってはいませんが、アメリカは既に二〇年くらい前から国家プロジェクトとして研究を実施しています。NICHD [National Institute of Child and Human Development] 等です。時間の制約もありますので、そうした諸研究の結果の概略だけを申しますと、まず母親が自分の手で育てたお子さんと、保育園で育ったお子さん、どちらに優劣があるなんて簡単に言えないということです。ただし、概してこれから申し上げる四つの条件をクリアしたときは、保育園で育ったお子さんの発達はずばらしいとも言えそうです。

一つ目は、母親の心構えです。私は働くけれど、この子どもしっかり向き合っていこうというお母さんの態度、心構え。二つ目は、そのお母さんを支える夫、家族、周囲のサポート。そ

して三つ目は、日中過ごす保育の質。そして、最後の四つ目は、働き方です。就労環境のワーク・ライフ・バランスです。

四つのうち、最初のお母さんの心構えはともかく、夫や周囲の協力、保育の質、そしてワーク・ライフ・バランス、これらはまさに今政府が「子どもと家族を応援する日本重点戦略」（二〇〇七年）以来取り組んできたことですし、今年になって打ち出された「子ども・子育てビジョン」、「子ども・子育て新システム」が目指しているものと合致するものです。これらの施策に関する資料を少しお示ししようかとも思いましたが、私に与えられた時間はそろそろ尽きてきましたので、あとのほうでもし時間がありましたら、ご説明をさせていただきたいと思えます。

最後に申し上げますが、母性愛神話の解放を長年言ってきた者として、七〇年代、八〇年代ぐらいまでは、日本社会が大変大事にしてきた母性を崩す者ということで、いろいろ抵抗や批判を受けました。九〇年代になって少子化が日本社会の大きな課題となって、その頃から母性愛神話の弊害について言及しても、批判よりは、むしろ応援のメッセージのほうが多くなりました。ただ、そのときから実は私の本当の苦しみが始まったようにも思います。

以前、教育心理学会で特別講演をさせていただいたときのことが思い出されます。当時、二〇年あまりの母性愛神話との戦

いの経緯をお話しさせていただきましたが、講演が終わった後、お一人の同世代の研究者が私を訪ねてくださいました。そしてこうおっしゃったんです。「私は長年大日向さんの母性愛神話からの解放論を応援してきた。でも、人間には必ず神話が必要でしょう。あなたは神話を崩した先の社会をどう見据えて、母性愛神話からの解放論を唱えているんですか」とご質問いただきました。私は崩すことに躍起でした。私の手に負えないほど、やはり日本社会にとっては強固な母性愛神話でしたから。

でも、お母さんが子どもを愛さなくていいと思ったことも、言ったことも一度もない。母親が本心に心豊かに子育てに関われるために、そしてもう一人の親である父親も含めて、周囲の人々、社会の皆が子どもの育ちにかかわり、その成長を楽しめるために何が必要なのか、その方途を模索し、実現することが、母性愛神話からの解放を主張してきた者に与えられた真の課題であると思いました。それが今、私がNPO法人の代表として地域の子育て支援をやらせていただいていることに繋がっています。地域の皆で、社会の皆で子育てを支えていこうということです。そしてそれがまた政府や自治体の子育て支援施策にもつながっていくことを願っています。

とはいえ、まだまだ道半ばで、これから本当の実効性が問われてくるかと思えます。残されたあとのところで、どんな課題があるのか、ほかの先生方のお話を今日うかがえること

を楽しみに参りました。それではとりあえず、私の話はここまでとさせていただきます。ありがとうございます。

高石 大日向先生、ありがとうございます。母性愛神話を巡る戦いをずっと続けてこられて、その先に何かあるのかという問いに今は取り組んでおられるということでした。先生のお話の中で、男性と女性が今は子どもを巡って深い溝を間にしている、それが男女の差ではなくて、仕事、合理性の社会と子育ての不合理の世界という、住んでいる世界が違うことによって生まれているんだというところに、はっとさせられるものがありました。女性にとっても男性にとっても、両方をしっかりと往復できるような生き方が、ひよっとしたらこれから男女両方が子育てに向き合っていくための一つのヒントになるのかなということも思い浮かべておりました。また討論で続きの話を伺えるかと思えます。